2021年6月
聖句随想・折々の言（ことば）

「 トマスを知って また歩みだす 」

牧師　森　言一郎

すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「私たちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。

（ヨハネによる福音書 11 章 16 節）

ここに記すことが、メッセージになるのかどうかは全く自信はない。だが、今、思うことを記してみたい。

＊

私が東京にある夜間学校の日本聖書神学校に入学したのは 1989 年 4 月だった。サラリーマン生活に区切りをつけ、29 歳になろうとする春のことである。入学式の日、神学校の礼拝堂で初めて歌ったのは、当時の『讃美歌第二編』の 1

番、「心を高くあげよ！」だったことを今でもハッキリと記憶している。

さいごの歌詞にこうある。**「おわりの日がきたなら、さばきの座を見あげて、わがちからのかぎりに、心を高くあげよう。」**と。不思議な高揚を覚え、燃え上がるような心でいたことを思い出す。

今でも伝道に燃える心はもっているつもりだが、あの頃の方が純粋だったかも知れない。当時の私は、まだ、B 型慢性肝炎との折り合いがついておらず、先行き不透明な感は否めなかった。一歩間違うと無謀とも言われても仕方のない献身だった。

＊

使徒パウロがエフェソの長老たちに語った、**「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」**（使徒言行録 20 章 24 節）という言葉

を自分の人生に重ねて、「早死にしても構わない」と思いを決めていたのだった。身勝手な話である。教会に仕える者としての献身であるならば、やはりこれは迷惑なこと。自分のことしか考えていなかった。

＊

2021 年の復活節、礼拝説教で 12 弟子のひとりトマスの存在を新鮮な思いで学ぶ機会が与えられた。12 弟子の言葉、あるいは、行動の場面というのは、シモン・ペトロを除くと、単独では極めて少ないことに今頃気づいたのだった。

キリスト・イエスの復活を信じるためには、**「この指を、手とわき腹に入れなければ信じられるものか」**と率直に口にしたトマスは、本質的には他の弟子たちと何も変わらないではないか。疑い深いのは、何もトマスだけではなかったことを思う。

＊

大貫隆という新約学の先生が居られる。牧師ではなく、研究者としてその道を追求されて来られたクリスチャンだ。大貫先生がトマスについてこうおっしゃっている。**「どちらかと言えば、地味な存在で、彼自身も承知していたことだが、物わかりも早くはなく、万事納得するのに時間がかかるタイプだった。イエスに同行しながら、ひどい勘違いをしたことも少なくない」**。(『イエス 22人の証言』日本キリスト教団出版局 2000年)

トマスは、物わかりが悪い上に、理解するのに遅く、勘違いをしがちな所があるのだな、と思うと、不思議と嬉しさを感じ、彼が身近になってきた。

冒頭に掲げたトマスの**「私たちも行って、一緒に死のうではないか」**という言葉は、ラザロの復活の物語の中に出てくるのだが、とても勇ましい。「これ、ペトロの言葉ですよ」と言われると、信じてしまいそうになる。

＊

去年、還暦を迎えた私である。5 年前の夏には、現代医学のいちじるしい進歩のお陰で、心臓の専門医による、カテーテルアブレーション術というものにより、やんわりと焼きを入れて頂き、いのち拾いした。その後もあちこちにガタが来ている。年相応に節々が痛み、膝も痛い。坐骨神経痛もこわい。疲れが出るのも取れるのも時間がかかるようになり、眠れない心配事も順調に起こり続ける。

30 年来だが緊張性の偏頭痛もある。胃薬もここ何年も手放せなくなった。過敏性腸症候群という腸の病気もあり、トイレと仲良しのことも多い。緑内障だって付き合い始めて既に 10 年が経ち、ゆるやかではあるけれど視野が狭まり始めている。この春には、いよいよ本格的な花粉症を自覚するようにもなり、目をかきむしりたい衝動を抑えるのが大変だった。何かに疲れ果て、布団を被ったまま起きたくないこともある。

＊

じゃあ、満身創痍なのかというと、決してそんなことはない。ボロもあるのだが、それなりではないかと思う。何より、献身の覚悟を定め、神学校に入学させて頂いた頃に感じていた、死に直面するような危機は今のところない。

私からすると岡山市で西大寺ほど便利で暮らしやすい所はない。スーパーも幾らでも選べて買い物には事欠かない。少し車を走らせれば、幼い頃に畦道を抜け、登下校していたのと同じ風景である田んぼが幾らでもある。先進医療に取り組める病院だって、どこを選んでもいずれも遠くはない。

前任地である最北の町稚内に暮らしていた頃、循環器内科が市立病院からなくなっていた。さびれた五福通りも、観音院も、裸祭りも好きだし、日陰にある西大寺の裏道や外れにはことさら愛着が湧く。

＊

旭東教会の 120 年に迫ろうとしている歴史、味わい深い会堂も有難いものである。この地で牧師として仕えさせて頂けることの恵みを覚え、もったいない幸せがある、と心底思うのだ。

＊

ところで、もう一度、ヨハネによる福音書に描かれるトマスである。この春、トマスは私に何かを思い起こさせてくれた、と感じている。彼の純粋さを自分も失いたくないと思うのだ。そもそも聖書とは、私たちに、単純なうながしや勇気をくれるものだったはずである。

聖書には記されていないが、その後のトマスは、インドまで宣教の旅に出て、やがて殉教したという伝承がある。インドにある聖トマス教会は、彼の宣教によって設立されたという。トマスは命懸けで福音を携えて歩き続ける彼の人生を生き抜いたのだ。**「わが主、わが神よ」**（ヨハネによる福音書 20 章 28 節）と告白したキリストを信じて。

＊

さいごに、もう一曲、賛美歌を引用したい。『讃美歌 21』の 510 番「主よ、終わりまで」の 4 節である。賛美歌はみ言葉と同じ位、私の信仰を支えてくれている。

「主は約束を かたく守り、
終わりの日まで みちびかれる。
私はここに 誓いを立て、
主よ、終わりまで したがいます」。

み名が崇められ、み国が来ますようにと皆で心を合わせて祈りたい。共に主イエスのみ足跡に従い、隣人を求め、隣人となり、悩みながらもこの地で歩み続けよう。

いつ、「その日」が来てもよいように、少しの緊張感をもって。end